





敬公 義書 卷之十

明治十九年 八月 點查章

敬公

初義知又義利

字小子 敬州 初夜

小前太君と稱し 尊

東照宮第九の御子御母に相懸院御君山城

の玉八幡の任人志水菅原初賀宗清の女なり

慶長五年 東照宮不位と大坂あり四年

十月九日 公と大坂の西ありて 誕生あり後

屋作と隈冬河信濃近江数々國ありて 六十一

和歌山文化会館 33.7.30 36264

A 250 7 11-1

萬石修を伴一役二位控大納言不任一磨安
二年庚寅六月七日逝去一修小御年五十一
歳一 政公と稱一 吉吉と云 政公吉孫下四

一 磨長十九年大坂冬陣の巻 東照宮

台陣立萬磨山の御陣巻を巡見一修公の時
源政公之 南龍を以て修公修公に或の
後堂和泉守を管不入也其れ物公不也て城
中城家公のい一敵より頻る不流絶さる也
くもつる鬼別甲と号上常公の政公其公

例不吉公のい一のいわく神色少と愛一吉
りさう常公のい高席を滅ぶ若公の御公とて
深く感一吉吉と 母時御年十五

一 元和元年大坂夏陣の巻 東照宮大臣吉

五月公乃公 南竜公海路より 公其陣
少公乃公と思公常不 成隊軍人 正公成隊
公乃公乃公 其時大坂の軍兵萬磨山
陣を取たり 東照宮是を御公一内夏
之馬重公を御公一 修公其公乃公不

事て彼留を野へ一且け事を南越公の
者く一とく 公河野孫三郎を以て其事を
南越公へ一とく 公河野孫三郎を以て其事を
多し一とく山下中平氏孫准令軍留孫三郎を以て
以て相逐多しとく 公河野孫三郎を以て其事を
伐之人の敵退く事とく 公河野孫三郎を以て其事を
少しとく 公河野孫三郎を以て其事を
とく 諸軍一同ふ 兵糧攻腰して 池者も別ふ
東照宮より 又御信經の馬使より 池者も別ふ

されまて 池者も別ふ 公河野孫三郎を以て其事を
池者も別ふ 公河野孫三郎を以て其事を
たふとく 公河野孫三郎を以て其事を

一 同御陣の首井孫三郎を以て其事を
公河野孫三郎を以て其事を
とく 公河野孫三郎を以て其事を
一 公河野孫三郎を以て其事を
孫三郎の馬使より 公河野孫三郎を以て其事を
公河野孫三郎を以て其事を
公河野孫三郎を以て其事を

徳氏の節は女節を名く親を侍れり
誤り者し初め忠のを名れ者も皆しと
かく是をより正し者し是す也一は名
まじりし事あり誠小若氏の義に徳若
色の義ありしをいひり也 予的 敬重
一美金騎を引奉り 朱照宮の在侍
りし押上 天^五幸^五業^五磨^五也 押上初代
押上より所不徳若若の味方名も亦御
りき皇位も味方を敵と心得て誤
り

幸は、使者を以て下即 行つた
半信御馬の前より其うしは
味方敵とて思ふ程ありしと
考へて忠告馬に押上を
涉邊事ふふ名を是の感涙を流し
敬を退きんが 忠告は、
を名れしと心より名れしと
り如の事をか其の武者なり
理の色傳すて押上中
2

而水よりきつむふかく降に想愛のしあふふい
実不名約のしあふふかく降に想愛のしあふふい
程の降のしあふふかく降に想愛のしあふふい
あふふかく降に想愛のしあふふい
相并南水
登書

一 松本一明生約國備利豊大造守云蕃書
の備後降と銘入て動くは屋原内丸御定心
丸右田と平正徳法軍を割く静め者り
云と致し降とて止りて動くは屋原内丸御定心

子ふあり今正徳を名ふ南と云く眼あり
とてと降とて動くは屋原内丸御定心
も少くは心致動くは屋原内丸御定心
雲一降とて動くは屋原内丸御定心
改之宮原内丸

一 寛永七年 台徳云御石例の名 公一屋原不
まのせう 成徳早人正虎御檄原御
堂城 善れも 台徳云正席を御前石
たれく 降とて動くは屋原内丸御定心
しと 使成持部 且酒奠とて物とて満ちたり

のより一時大井大徳が利権の例より

尾張孫御國より 天の御不例を討の外

次第因程され御延言より入申内程

より上り色と 台様云正席向ひのひ

我宿字全帳せう屋儀敷ふも安堵にて延言

おし色と御名りきりしと御名ぬ 公此

公我を致しよりし事大徳ののり

一 寛政五年 公此道春くくふ不登堂と上野

道長、別荘 公此建文宮主 祿旨思孟の御城安部

公より先聖殿より額を御深筆と道長より

額を彫り彩色を施しより 利是御馬代を夜

の始よりけし御年二十三

一同十一年 大敵と御上座の首西九歩角より

酒井雅樂政世とより色と一時御深筆より西

九歩角より 故少雅歩政通家より 其後雅樂

御之家様より 井伊掃部政経より 同少雅樂

御敵の歩流とを位より色とされし掃部政

経より色と入部より 其より ありて ありて

よりて雅樂の遍塞城致されりて其後瑞
羽成歌集入正座一御り一其以致を雅樂
御座るの時の御座るを今も今も
首をなまきんまを入一とて大ふ

その剛正城一其一とて今時御年三
十五

一 同十二年四月十日 正利の學校より
文宣王の御座る一其一の御座るの御座る
一其の御座る一其の御座る一其の御座る

審をむして 堀正意をて學校の主不同を
多し御座るを御座る一其の御座る一其の御座る
學校をていし一其の御座る一其の御座る
今もの御座る一其の御座る一其の御座る
とて其御座る一其の御座る一其の御座る

一 同十二年肥前御座る一其の御座る一其の御座る
板倉内膳正石川十蔵を御座る一其の御座る一其の御座る
一其の御座る一其の御座る一其の御座る
戸田たつと其の御座る一其の御座る一其の御座る

ちをい倒すといふ一時漢庭をふむるも縁
 の不若縁の御孫あらはそ外との言のよめとい
 極別の出来らる中上りなると又修不若縁を
 若縁を我未之と云 大相國の御孫といふ
 一時漢庭をふむるも事やふとも江戸乃
 也といふ縁の御孫の御孫といふを云はれ
 と言ふといふ上考れよ 此の御孫といふは山
 行幸の時皇親義滿御孫といふ御孫といふ
 嗣哉関白の座といふを云はれ御孫といふを

孫せり今まけて 台命ふはり又後世を
 是と云はらむが 台命ふはりといふ縁
 といふ縁の御孫の御孫（なりといふ言あり若縁を
 漢庭をふむといふ言の御孫の御孫を云はり又後
 世の御孫の御孫を云はり山王の社といふ言
 若縁を御孫の御孫を云はり又後世の御孫を
 といふ言の御孫の御孫を云はり又後世の御孫を

改
 言縁

一 正保元年八月本宮路御孫の御孫といふ

五洲洪水一者れと涉り了道は花を夏木に
いせとて御正家あり一と新と水とさうり
者れと 致さふとさうりすに戸板炭炭と
よふ少座のひて新と井戸をかひせとて位
付とさうり通らふ取身いさうりすりて井へ落
者れと又濁り一事とありし 御少座の早
事凡人の及りさうり事と人感一奉り
一とさうり御正家とす 御少座

一 致さふとさうりすに戸板炭炭と

事とて水縁とあり如きあり一取らぬ付満と
たれと不取らぬ人減らさうりすと中者れと
とれとさうり不取らぬ人増えさうり位の者い
御少座の節のこの者さうり 得るい物事の者
上使の池をのこの指さす之傍にまてりたさうり
とつとさうり人とさうりさうりさうりさうり
感涙ふ及い 只と御涙ととととと

らうと火
下向

一 致さふとさうりすに戸板炭炭と

徳有^り道^{あり}の御著^り方^も不^思石^屋度^を著^り不^思
江戸^{より}石^屋堂^或本^御意^不入^りふ^きな
少^少金^を枚^に納^れも^なの^上の^道を^表し
納^り御^金入^事を^納の外^御願^ひせ^れ
少^少性^能流^内道^をと^て横^井十^高乃^為少^位
聞^られ^ば世^堂即^本御^求の^経度^思は^さ道^也
少^少御^家中^の物^御借^りは^経上^に付^云世^堂
あ^らは^さと^と通^るに^納上^に表^し納^り御^金入^り
か^ら御^意不^思御^意不^思二^本を^御納^り

御座^の間^の御^意不^思石^屋堂^不柱^立れ^を御^化
界^の後^御秘^藏の^想と^て定^是書^を著^りて
今^御願^の前^御あり^御十^高乃^為の^金子^城御^意
御^意不^思と^は又^御家^中の^儀を^深く^思入^り
し^れ御^意不^思

一 改^を御^化り^あひ^の御^化計^打は^し御^意不^思
御^意不^思御^意不^思或^の御^意不^思御^意不^思御^意不^思
御^意不^思御^意不^思御^意不^思御^意不^思御^意不^思
御^意不^思御^意不^思御^意不^思御^意不^思御^意不^思

由はたあたまをさきりて成るはるるを御中誠進言
おれ 三音の出御の事をももろ一今一ッ
す一百させ給へと申す事あり 二信おの進言
とそりて申誠進言の事 三ふおれを信
有りて御酒を止まひて御漏石上り就とそ
致す夜漏御教言す 每夜御教言す
申下足長島庄長島庄年少くも一うつ然おれ
申す御大人の教言を信御教言す御
病を治るはるる御忠切の御事をももろ一

歎の内少と人 と 敵對さるるの事おれ世
為の事おれおれおれおれ 御事御事
おれおれ御事のおれおれおれ 御事御事
御事御事おれおれおれ 御事御事
御事御事おれおれおれ 御事御事
御事御事おれおれおれ 御事御事
御事御事おれおれおれ 御事御事

一定條院信正 その御事御事
御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事

押通一りしてハ押通るるヲ立通と申され
一ハ上御意ハ信向たふすあハ信向の宗
よりいふ事申御座りし事ハ誤り一ハその
中一ハ一ハ九ハの御意ハ信向の宗
御座りし事ハ信向の宗ハ信向の宗
信向の宗ハ信向の宗ハ信向の宗

一 致々沙弥極悪一を在御自身の事ハ信向
言とまはし今暫く待れし事ハ信向
つらせし事極悪一極悪一極悪一極悪一

すせし一是ハ希の怒^怒外ハ極悪一は信向
その事ハ信向一は信向一は信向一は信向
人の極悪一は信向一は信向一は信向
遷されし事ハ信向一は信向一は信向

と云う

一 致々御代武切もあつて古老の士早岩沙弥
御座りし事ハ信向一は信向一は信向一は信向
事ハ信向一は信向一は信向一は信向
川原信向一は信向一は信向一は信向

うと西征あり又長久の終合致池田
孫入武藏義父子踏し極力のあり岩橋の
城を攻落し丹羽の助助一旅悉く討北と
して味方の勝を告ぎれば今日の軍ふ、負言
と成れり、味方の討北、勝言と成り味方の勝
軍を告言すと、中絶し申す是、岩成軍ふ
必、惡敵の我ふ、合致の事、中絶し申す
也と、上程くは、思ふ事、大関の宣ひと
理りて、我ふ、敵の勝將と、申す、前、此

山空残り多く、勝言と成り、申す、東向を、勝將と、
首尾、洞ひ、う、事、却、是、在、い、れ、き、道、草、を、
う、斬、之、東、向、の、山、を、う、志、して、將、を、切、取、
の、と、う、ふ、首、尾、と、首、後、洞、上、た、わ、い、し、池、邊、に、
味、方、を、是、と、申、す、此、新、兵、を、討、北、し、た、り、
後、之、と、成、り、池、田、敵、に、向、の、大、切、な、る、長、谷、を、
攻、め、申、す、中、絶、し、申、す、岩、橋、を、攻、め、一、日、占、
大、利、を、得、る、と、い、へ、り、士、卒、皆、長、谷、の、向、に、
立、て、居、り、思、ひ、て、い、れ、は、岩、橋、を、と、宣、ひ、申、す

と申す事なれど海客を感入す事

一 汝等の御前不才岩海客長居て古城古我の
所御御事一ふ 三條あり屋島の城と海客は
富客の地と云ふ近年、海客有りて要客府と云し
と海客岩城内ふ合位事有りき時海客
は白鳥殿の御印ふ少敷しと將の御印存せ
ぬと申す物無事なる事と云ふ 汝も海客の
薩摩守忠名御法印の城ふありてまゝに
福徳なる古事海客と云ふ事の御御事一ふ

在ありてし先年園ヶ原の礼の時不才の
ありて武田の巻と海客不才と申す乃
ヶ原の平城を御守り水法きの所ふ所を
捕へりて不才あり事也ありて要客の地ふ
座を捕へて有りて有りて中ふ中ふと云れ
るれい忠名郷の地ふい古事人の宮事事ふ
あり今令の天ふい親之の天ふ有れい我忠名を
令ふ事事ありて若而國有り忠名事と
忠名を令ふて城ふ能く文を記にあり

道近初遊ひて一載を布衣に在りて思ふに城
卒福又二水りき少くとも少くも不無なきふ
り候に候も昔れに福徳も其御宗宗子感
激を催し退きしと申上り候も 改元數年
の由昔若一様不詳なり方ある字候と云

一 改元の時温彦後妻貞右の書後勅の由不詳
水不詳陽をり申申候と一勅方少敷く藤本
等事是れ不詳 尚書院者不詳申り候に
年月を理て山本十宗古傳中人改元後書

は後月之跡尚書院番の少政明なり其跡後不
詳彦彦を更を書かぬ年中央乞ひ先年
御制法を云候候一 上を勅方不詳知
の由之由を申上り候 尚書院候に候も
不詳候も改元書部 尚書院候に申上り候
納めしと申上り候 三御宗宗子跡を更に
かへし不詳候 年月を理て不詳候と云
少政不詳候候の由一 少政 則後月之跡を
御宗宗子 則より外候一 候一 候一 候一

権現権を同一御心して下の事と此、
なくよく少少入能事、御取上事遊言一
一敬云或の少奥へ入せ、色徇の由ありてあり
者、うち不道春法、下風斗、まして来り
之此の用人、服田の何某か向て之、云ふ
其へ今徇ありてめ、少程之といひ、道春の言
我へ、少の易き事なれ、又、之の事のと
て、歸りぬ、少の言、之表へ、おき、少の事、
す、之を道春、其しと何と、其へ初せ

さ、
と中上、一、大、き、不、好、せ、少、の、奥、へ、通、り、て
我、へ、不、何、的、の、昔、顔、色、の、悪、き、成、お、つ、し、と
少、の、事、な、れ、服、田、の、言、を、い、て、亦、向、せ、
と、
藤、の、心、事

一 或の云、御心、上、を、も、知、り、て、少、の、事、
あり、何、て、あ、り、と、何、と、言、ひ、く、不、中、上、の、御、心、
あ、り、不、向、不、物、を、書、中、事、な、又、少、の、事、を、書、り、
之、法、深、を、智、少、の、事、を、り、少、の、事、を、い、わ、く、少、の、事、

たの何ふ口してと新つてちぬ後い地の
敷てそそし御念の中 以地の敷とい金の後若洲在也
宮崎の事あり主校附録

一 戦場あゝあゝ人多く討まはる負軍の方より
御軍の方へ討まはる事勿論せいでいれしを
敵よりくむししを搦り搦るに即ちるを又
方よりしを惣受ししに中し負まはるを
い事をあて討まはる合然し初め
事よりし初め終れしを也 杯南水並其同
一 馬道中並列金若小止止常と搦り搦る事

馬道中九つと五つ所中中りし一ふそそい
いし御意をたをたれましし右の弱を馬道中
たれま也又と誰そし言や明ら馬道中い
八つと馬道中い九つと馬道中い何の形ふ
少と少自らの者へ馬道中いし馬道中い
搦り搦りし馬道中い馬道中い馬道中い
前とお弱中い中し言し馬道中い
馬道の別限を弱を搦りし馬道中い馬道中い
馬道中い九つと馬道中い馬道中い馬道中い

おきけおとすめおく九つおいそげおんたけり
そわい又お前より又度下はら台大方お
中お後いそげおいそげおい八つおいそげお
毎を所解より一はくお所解より一はくお
のんおあより一はくお大府す人の物お
限お道一より一はくお畢竟の儀より一はく
おそより一はくお所解を制し事おゆおいお
自ら心後より一はくお別限より一はくお減お福
おおと又度より一はくお

一 態若主設所油小司馬澄その自分のさきよに
吾人ふとある事なり一但一平生のさきよ前ふ
對していひし事いせさきよの事やと其に
致す所お不所自前も何事あり人お所油
所初も往の事い空はた毎交所油より
人と所拂いと往の事一言行相違の所お
しよとも理の南とといの後を往は
少一と所より一はくおいそげおいそげお人の
空おより一はくお是あおお不しお所拂いと往

山根より少くはたれんし

一 毎日の諸事の御概式を決定し朝夕の御
膳御親存とて別段御定り遣はりさせし
一 江戸より御意向の上家直御返(西の御對
面)を往らぬ宰相官の人大臣を同座少く
御入しんて 致しぬ宰相(御意を往らぬ)と
さす御物も結構な大臣とて電りさす
之も 尚の宰相をいふ大臣とて致しぬ
之例を御少くさす御意を往らぬ

のまへ御出の御事と 御意を往らぬ宰相官の
御入しぬす 尚の宰相をいふ大臣とて致しぬ
少くさす御人と御意を往らぬ御事とて
とて御意を往らぬ御事とて御意を往らぬ
少くさす 礼部より御意を往らぬ御事とて
御意を往らぬ御事と 尚の宰相の御事とて
御意を往らぬ御事と 御意を往らぬ御事と
御意を往らぬ御事と 御意を往らぬ御事と
御意を往らぬ御事と 御意を往らぬ御事と

さう言ひても 難斗 殊に有識の成りゆき
を述べた 形 不字をいひて 一

一 難斗 一 形 不字をいひて 一
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 改 爲 前
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 上 何 不 在
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 中 何 何 何 何
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 事 理 國 體 の 成 由 高 僧 一 佛 之 傳 承
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 一 難斗 一 形 不字をいひて 一
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 一 難斗 一 形 不字をいひて 一
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 一 難斗 一 形 不字をいひて 一

敬云 法華をいひて 一 難斗 一 形 不字をいひて 一
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 佛 書 の 卷 第 漢
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 の 成 帝 の 時 四 十 二 章 經 々 中 初 中 第 一
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 波 里 支 子 佛 徒 の 成 梵 漢 々 一 増 修 々 中
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 漢 の 字 々 翻 譯 々 一 の 成 漢 々 佛 書 不
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 按 々 書 々 一 佛 徒 々 一 漢 々 佛 不
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 一 難斗 一 形 不字をいひて 一 根 本 云 理 云 一
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 人 の 成 一 佛 徒 一 一 佛 徒 一 一 佛 徒 一
一 難斗 一 形 不字をいひて 一 一 難斗 一 形 不字をいひて 一 一 難斗 一 形 不字をいひて 一

少^候の爲を^候ありて父を^候ありて^候別して禪家不^候
ありて天^候理も^候ありて^候元^候代^候用^候ひ^候推^候
さ^候り^候或^候御^候心^候を^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
取^候御^候心^候を^候思^候は^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
只^候今^候の^候御^候心^候を^候思^候は^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
其^候後^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候

一
いつと^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候

見^候ゆ^候やと^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
事^候は^候一^候時^候の^候初^候也^候と^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
或^候の^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
内^候の^候何^候と^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
も^候知^候道^候さ^候り^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
是^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
一
極^候列^候有^候鳥^候一^候而^候入^候湯^候を^候危^候は^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
未^候も^候未^候も^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候
少^候は^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候御^候座^候は^候い^候ふ^候

少き者急ぎ下ははらへも少くも不苦のりそ
段より入湯はととせ給へ一不語入御急
をあらうとかりし哉

一 小牧邊(馬御)を響けふりぬ故の山小牧も
小牧山の山子候見えし御響けふ馬御の馬御
候より一面も小牧山より方を見たりしと云ふ
風流く吹く馬御中途より馬御に逢りしを
小牧山より形は何れも馬御早馬を返り
馬御御候(馬御)と云ふ馬御水と云ふ馬御より

控まじし一変へ何處候馬御と云ふ馬御何と
はなれ違ふは馬御御機嫌悪馬御馬御候
御例の物も馬御不終小牧山をえりし候
幸ひの言を馬御馬御候馬御候馬御候
形いふ馬御馬御候馬御候馬御候馬御候
逆意馬御候馬御候馬御候馬御候馬御候
不却て山の候馬御候馬御候馬御候馬御候
馬御候馬御候馬御候馬御候馬御候馬御候
馬御候馬御候馬御候馬御候馬御候馬御候

一 致公の智く儒道を好まざるも 出家す
 妻ふ所ありしをひありきり長き所 和ふ所は
 大り程の清秋の望み 又天を妨ぐるも二二度
 痛涙の雨れ 天を忌みし 所を忌むれば
 傷あり傷痛しく有らば 能く思ふ 思ふ
 さればこそ 傷あり傷痛も 留士の問ふて
 傷痛 冷の明 仰せよと考り 一度は 武神安齋
 一 夜は 正佐師徒を考り
 一 慶安二年 大敵之日走入 所を病の時

御三歌極方と所佐の南 大敵公お座る後
 所三人極所多病の苦之 致公所中風の後
 少く水と興あり 御三山と苦あり水内
 吾多之久吉史所中問を所山に 不所成多た
 中うれん所とと 中 通所を致公所問極され
 所の外御三腹少く 酒井 讀波守之 所使を
 されし所は 今度多病ははれやと
 上を考を是道に致公所病 和後を病考を
 所病ありし 所無きと 考りて 山ははれやと

御事由目付危料の通事一後々申事あり
中々取合も侍不在興をかせ中後い難
以爲不為を延延すりてく不滞を旨りと後々
きききりも後後守法不滞切御の由
事不中法は抄割の後不中法にせうふも法
興めて御事由目付危料はありしと
御廟の御事一興く後事を改め申後中法
右の明由目付ありしとふも中法一
興の由中法ありしとふも中法一

の事後抄合は所ふ中付合と法使の人(一書系)
あつて事跡一とそ 世の御事由目付五十
一 同三年涉遊去者相持事を以る在りては
付れは御事由目付の儀とと合點は是え
五十五と不審成候又と不意東候もなり
今の内ふ道春ふお尋至也 涉國へ御事由
云存あり 道由とら御付也 御事由あり
御事由の海右の御法もえ 御事由あり

一 四月廿八日 次第 水 脚 氣 色 却^{ちか}せられ 脚
 座の弓の 水 脚 之 所の 劍 之 脚 經 入 之 後 最
 少 總 意 者 脚 香 香 合 の 信 心 圓 を 指 少 之 所 以
 口 入 之 所 以 之 脚 氣 色 中 者 乃 是 瑞 龍 云
 早 脚 之 十 一 節 之 後 少 角 水 脚 氣 色 中 せ せ
 進 之 時 意 者 又 信 心 圓 を 脚 口 入 之 所 以
 亦 乃 是 脚 氣 色 中 者 乃 是 瑞 龍 云 一 脚
 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以
 者 乃 是 意 者 而 一 脚 氣 色 中 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以

一 脚 氣 色 中 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以
 亦 乃 是 脚 氣 色 中 者 乃 是 瑞 龍 云 一 脚
 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以
 者 乃 是 意 者 而 一 脚 氣 色 中 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以 之 所 以

この御意を承るに侍奉仕と程とてさす所御意の御意を置く鬼角山より一むこのこと程は御遊幸の御意御意の外御意も御意をさすれり今りに御意御意又御意御意もさすれり今りに御意御意又御意御意もさすれり今りに御意御意又御意御意もさすれり今りに御意御意又御意御意も

何ぞ御意ははる

御意訓

皇意御意(の御意)の御意

御意を

御意を

一 君と事ハ人城と云ハ民の心をとらる事
ナリ 君の御意ありきれば民を治るは事
ナリ 君と事ハ人城と云ハ民の心をとらる事
ナリ 君の御意ありきれば民を治るは事
ナリ 君と事ハ人城と云ハ民の心をとらる事
ナリ 君の御意ありきれば民を治るは事
ナリ 君と事ハ人城と云ハ民の心をとらる事
ナリ 君の御意ありきれば民を治るは事

その者より一に法れを見しに法れを以て
されに事ありしに事ありしものや

一 かくせきには常小字の字を以て初を以てやと
しるあり然れども字を以て初を以てしるありし
ゆめは先を以てふらんしとて事ありし
こととてしるありし人ありし物ありし
されどもこの事ありしとて事ありし
なりし人もや余の事ありしとて事ありし

一 藤原の事ありしとて事ありしとて事ありし

かくしありしとて事ありしとて事ありし
ゆめは先を以てふらんしとて事ありし
こととてしるありし人ありし物ありし

一 藤原の時ありしとて事ありしとて事ありし
多くの人ありしとて事ありしとて事ありし
物ありしとて事ありしとて事ありしとて事ありし
士の道ありしとて事ありしとて事ありしとて事ありし
このやうに事ありしとて事ありしとて事ありし
一 藤原の時ありしとて事ありしとて事ありし

いふまでもなく又君のいふことの事なることを
道に之れを苦むるの思ひのこゝろを感成に
行跡を去るを事を思ひ居りてなれ、若し
此れを離ふおほいんと思ふに思成さるる事
なきをよし先ある事なるべし
君のいふ事おほいなり、大に思成る
朋友ありき、行ひあるれ、人々の事成
つていふものに君のいふ人にお事な

一 當まるところとすてり、又いふもののいふ
想きと、おほひてり、思ひおほいなり、
出入なき事なり、我理千つちありて、
いふことと思ひ、思成るなり、
下なるもの若し、おほいなる事な
せしむるに、思成るなり、
一人をいふ、人におほいなる事
思成る事、いふ人の行跡を、
思成る事、いふ人の思成る事、
思成る事、いふ人の思成る事、

明女公よきをうりしとも ちて天下のほまれを
とるものなり 世にふあていへりし一は世に
魁ふ入く 思ふなき事なり

一 縁ありしむしふ前のりめをわねを時
とほりぬきふ 前事常の位なりし時をた
りし人常事の定しきりてふ 縁ありし
なりし縁ありしなりしなりしなりしなりし
か事ありきなり 又世にふしきなりし
縁の遠の遠なり 縁ありし縁のよのあり

あるゆかり 或は世にふのり馬ふのり行なりし
しなりしなりし 中 昔れし他人 是をわて
るなりしなりし ありしなりし 縁ありし
ふなりし 一は世にふしきなりし

一 礼法ありし 會合ありし 縁ありし 縁ありし
しなりしなりし 前事常の位なりし時をた
りし人常事の定しきりてふ 縁ありし
なりし縁ありしなりしなりしなりしなりし
か事ありきなり 又世にふしきなりし
縁の遠の遠なり 縁ありし縁のよのあり

それ以上の人の位よりある事とある事
一人の位よりある事とある事
思ふ事一々ある事とある事
ある事とある事
ある事とある事

一 人の位よりある事とある事
ある事とある事
ある事とある事
ある事とある事
ある事とある事

一 人の位よりある事とある事
ある事とある事
ある事とある事
ある事とある事
ある事とある事
ある事とある事
ある事とある事
ある事とある事
ある事とある事
ある事とある事



